

日本語学習者の作文コーパスから見た読点と助詞の関係性

An Analysis of the Relationship between Particles and Punctuation marks

As Seen in the Usage of the Written Corpus by Japanese Language Learners

岩崎 拓也

要旨

本研究では、JCK 作文コーパスを用いて、読点の直前に現れる品詞にどのような偏りがあるのかを母語別に統計的手法によって分析した。具体的には、学習者間で最も偏りが見られた助詞のうち、係助詞と格助詞を取り上げ、係り受けの関係から読点が打たれる確率を分析した。

分析の結果、係助詞と格助詞の直後の読点は、修飾部と被修飾部の距離が遠くなるほど、両者の構造的なつながりを示すために打たれることが明らかになった。さらに、係助詞の直後の読点と係り受け距離との関係は、日本語母語話者を基準とした場合、中国人日本語学習者は読点を多用してはいるが、その傾向は類似していた。しかし、韓国人日本語学習者は読点使用が少なく、その傾向も異なっていた。格助詞の直後の読点と係り受け距離との関係については、中国人日本語学習者は、格助詞「で」「に」では日本語母語話者と類似した傾向を示したが、格助詞「が」「と」「を」では異なっていた。一方、韓国人日本語学習者は、格助詞「が」「で」「に」では類似した傾向を示したが、「と」「を」については異なる傾向を示すことが明らかになった。

キーワード：句読点、助詞、係り受け、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者

1. はじめに

実際の日本語教育の現場において、句読点（特に読点）の打ち方の指導が行われることは多くない。これは、日本語母語話者や日本語学習者が読点をどこで打つかという実態把握が遅れていることが1つの原因であると考えられる。本研究では、読点の使用実態を把握するため、どの品詞の後に読点が打たれやすいかということを量的なデータから明らかにすることを目的とする。日本語母語話者と日本語学習者が日本語で書いた作文を分析対象とし、句読点という観点から、母語別に比較対照するというアプローチを採る。

既に、岩崎（2016、2017 予定）では、日本語母語話者、上級中国人日本語学習者、上級韓国人日本語学習者が日本語で書いた作文を対象として、それぞれの句読点について分析を行っている。本研究においても同じデータを使用し、読点使用前に現れた品詞が母語別にどのように偏りがあるのかを明らかにした上で、最も偏りが大きかった品詞を取り上げて、読点との関係性を明らかにする。

2. 先行研究

ここでは、日本語教育の分野において句読点に焦点を当てた研究をいくつか挙げる。

中国人日本語学習者を扱った北村（1995）では、日本語の「文」と中国語の「句子」とは概念が異なり、いくつかの文を1つにするときに、日本語では句点（。）を使うところで、述語が言いきりの形でも、読点（、）を使うことがあることを指摘している。

小林（2005）では、文型を取り上げて分析している。複数の意味や接続の形がある「ために」と「によって」を例に挙げて読点との関係を調査し、これらの文型は基本的に読点が付くが、文型の意味などの内的要因や、より上位の構文との外的要因により読点が付かない場合もあり、「この文型には読点必ず伴う」と一概には言えないことを指摘している。

町田（2006）では、教科書分析を行っており、読点に関する先行研究や日本語教科書で使用されている読点を踏まえて、留学生に読点の打ち方を指導する際のポイントを考察している。また、日本人大学生49名と、学部在籍する中国、韓国、台湾の留学生34名（中級以上）を対象に、短い文章に読点を付与する実験を行っている。実験の結果、接続詞、条件・理由節、時を表す節の後の読点使用が多かったとしている。

薄井・佐々木（2013）では、日本語学習者が作文において句点（。）を使用すべきところに（、）を使用する事例を取り上げている。この誤用は中国人留学生にのみに現れ、韓国人留学生をはじめとする他の日本語学習者には見られない事例として紹介している。その上で日本語の句読点と中国語の「標点符号」の違い、および日本語と中国語の文末の捉え方の違いから、中国人留学生（上級・超上級）の句読点の誤用の事例を分析している。

さらに、佐々木・薄井（2013）では、中国人日本語学習者が書いた日本語の作文とその母語訳、担当する授業で書いてもらった作文を対象に、句読点使用の正誤判断テストを作成、実施し、学習者の読点の理解度を調査している。正誤判断テスト実施後の考察では、並列を表す読点の使用が中国人学習者には判断が難しいことを示している。

岩崎（2016）では、JCK作文コーパスの作文データを使用し、日本語の作文における日本語母語話者と上級日本語学習者の句読点の多寡について、統計的な手法をもとに分析を行った。その結果、日本語母語話者と上級中国人・韓国人日本語学習者の作文では、中国人日本語学習者は日本語母語話者に比べて句点も読点も打つ頻度が高く、韓国人日本語学習者は句点の数は日本語母語話者と類似していたが、読点の数は低いことが確認された。

このように、日本語教育における従来の句読点の研究では、日本語の教科書や学習者が書いた作文のみを分析対象とすることが多く、同一条件における留学生が書いた作文と日本語母語話者の作文との比較や統計的手法を採用した量的な分析は少ない。そこで、本研究では上述した比較や手法を採用した分析を行う。また、他人の修正などが無い作文を対象とすることで、現実に使用される日本語の文章という、より現実に即した日本語について分析・考察することに価値を見出したいという視座に立ち、論を進める。

3. 読点使用前に現れた品詞の偏りの比較

この節では、岩崎（2016）での分析結果を受け、「母語別に句読点の使用傾向が異なるならば、読点前の品詞（形態）にも偏りがある」という仮説について統計的な手法を用いて検証する。本研究で扱うデータは、岩崎（2016、2017 予定）と同様に JCK 作文コーパスのデータを使用した（詳細は岩崎（2016、2017 予定）を参照）。

分析データを Excel 上でデータを展開し、条件式を使用して、読点が打たれる直前の品詞を抽出した。ただし、UniDic を使用した形態素解析では、たとえば、「名詞」は「名詞-普通名詞-副詞可能」のように、品詞の種類が小分類まで行われ、そのままでは有意差が不明瞭になる。そのため、手作業で大分類に再整理した上で今回の分析データとして設定した¹。その後、SPSS (ver.22) を用いて一元配置による分散分析 (anova) を行い、その後、Tukey HSD 法と Games-Howell 法による多重比較²を用いて分析を行った。

分析の結果、各群のグループ間でそれぞれ副詞、助動詞、助詞、動詞、名詞、形容詞、形状詞、未知語に有意差があることが認められた³。つまり、上記の品詞に関しては母語別に統計的には有意な差があることが証明された。

表 1 多重比較の結果

従属変数	母語 (I)	母語 (J)	平均差 (I-J)	標準誤差	有意確率
副詞	日本	中国	-1.3000*	.3580	.001
		韓国	-.1833	.3035	.818
助動詞	日本	中国	-2.7500*	.8735	.007
		韓国	.9167	.5480	.221
助詞	日本	中国	-12.1500*	2.5402	.000
		韓国	8.5333*	2.2046	.001
動詞	日本	中国	3.5167*	.9231	.001
		韓国	5.3667*	.7263	.000
名詞	日本	中国	-3.0167*	1.0622	.014
		韓国	-1.6333	1.0622	.276
形容詞	日本	中国	-.3500	.3400	.560
		韓国	.8833*	.2716	.004
形状詞	日本	中国	-.1167	.0645	.172
		韓国	.0500	.0365	.361
未知語	日本	中国	-.3500	.1596	.080
		韓国	-1.1000	.0648	.277

¹ 以下、本稿における品詞の名称は形態素解析器 MeCab の結果と同じ名称を採用する。

² 等分散性があった名詞には Tukey HSD 法を採用し、それ以外の品詞(副詞、助動詞、助詞、動詞、形容詞、形状詞、未知語)には Games-Howell 法を採用した。

³ 副詞 (F (2, 177) = 7.837, $p < .01$)、助動詞 (F (2, 177) = 11.150, $p < .001$)、助詞 (F (2, 177) = 34.817, $p < .001$)、動詞 (F (2, 177) = 22.101, $p < .001$)、名詞 (F (2, 177) = 4.042, $p < .05$)、形容詞 (F (2, 177) = 8.935, $p < .001$)、形状詞 (F (2, 177) = 4.948, $p < .05$)、未知語 (F (2, 177) = 3.349, $p < .05$)

表2 読点の直前の品詞の偏り（打たれやすさ）

日本語母語話者より	中国人日本語学習者	韓国人日本語学習者
読点使用が多かった品詞	助詞、副詞、助動詞、名詞	なし
読点使用が少なかった品詞	動詞	助詞、動詞、形容詞

また、多重比較の結果（前頁表1）から実際に作文群間にどのような偏りがあるのか分析を行った。表2は多重比較の分析結果をまとめたものである。

分析の結果、動詞の後の読点使用が少ないことは、学習者間の共通の偏りであることがわかったが、その一方で、それ以外の品詞では学習者間で共通していたものはなく、母語による特有の偏りであることが確認された。特に、助詞は中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者間において平均差が最も大きく、日本語母語話者を基準とするならば、学習者にとって助詞の後に読点を打つべきか判断が難しい可能性がある。そこで、以下では、助詞を取り上げ、どのような助詞の後に読点が使用されていたかを観察していく。

4. どの助詞に偏りがあったのか

学習者間で最も有意差が見られた助詞について比較を行った。分析データの中の助詞を下位分類し、それぞれの助詞に対して分散分析を行った。

表3 直後に読点が使用されていた助詞の分散分析結果

		平方和	df	平均平方	F	有意確率
係助詞	グループ間	728.711	2	364.356	11.907	.000
	グループ内	5416.017	177	30.599		
	合計	6144.728	179			
副助詞	グループ間	10.811	2	5.406	1.266	.285
	グループ内	756.050	177	4.271		
	合計	766.861	179			
接続助詞	グループ間	4592.411	2	2296.206	48.551	.000
	グループ内	8371.117	177	47.294		
	合計	12963.528	179			
格助詞	グループ間	749.200	2	374.600	25.172	.000
	グループ内	2634.000	177	14.881		
	合計	3383.200	179			
準体助詞	グループ間	.011	2	.006	1.000	.370
	グループ内	.983	177	.006		
	合計	.994	179			
終助詞	グループ間	.878	2	.439	.344	.710
	グループ内	226.033	177	1.277		
	合計	226.911	179			

分散分析の結果、係助詞と格助詞と接続助詞に有意差が確認され、それ以外の助詞では全て有意差が確認されなかった。以下では、係助詞と格助詞を取り上げ、句読点の関わりについて考察していく⁴。まず、量的な分析からどのような偏りが見られるかを明らかにし、その後、具体的に例を見ながら質的に考察する。

5. 係助詞と格助詞の後に読点は打つべきなのか - 係り受けとの関わり

係助詞と格助詞の後に読点を打つかどうかの問題は、係り受けの問題と密接に関わっていると考えられる。例えば、白井ほか（1995）では「書き手が読点を付与した従属節は、それだけ、遠くに係る可能性が強い」ことを指摘している。これは、係助詞と格助詞の後で使用されている読点についても基本的に遠くに係る可能性が高いことを示唆している。

この指摘を受け、本節では、日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれ使用する係助詞と格助詞を対象として、直後に読点を使用されている場合と使用されていない場合とで比較し、係り受け距離⁵に有意差があるか分析を行った。分析は全て UNIX 上でコマンドラインから操作を行った。まず、JCK 作文コーパスの全ての作文データを呼び出し、日本語係り受け解析器である CaboCha（南瓜）（ver.0.6.9）をもとに係り受けを解析した。解析後は、母語別に csv として出力した後、R（ver. 3.2.0）を用いて分析を行った。以下、5.1 で係助詞、5.2 で格助詞の係り受け解析の結果を示し、考察を行う。

5.1 係助詞の係り受け解析の結果

まず、日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者の係助詞の結果を見ていく。表4は、係り受け解析の結果、確認された全ての係助詞とその頻度を示した表である。

また、次頁の図1は読点の有無に関係なく、全ての係助詞の出現頻度と係り受け距離との関係性をグラフ化したものである。なお、このグラフは傾向を見るために示すものであるため、10以上の係り先の頻度については対象外としている。

表4 各作文群における係助詞の出現数

	こそ	さえ	しか	すら	ぞ	は	も	や	総計
日本	12	9	35	14	2	2483	1148	1	3704
中国	11	6	15	1	0	2613	839	1	3486
韓国	7	14	36	1	0	2325	1051	1	3435

⁴ 接続助詞については、岩崎（2017 予定）で詳しく分析を行っている。

⁵ 「係り受け距離」とは「係る成分が、文節で数えて幾つ後ろの成分にかかっていくか」を示す距離のことである（金・樺島・村上 1993）。

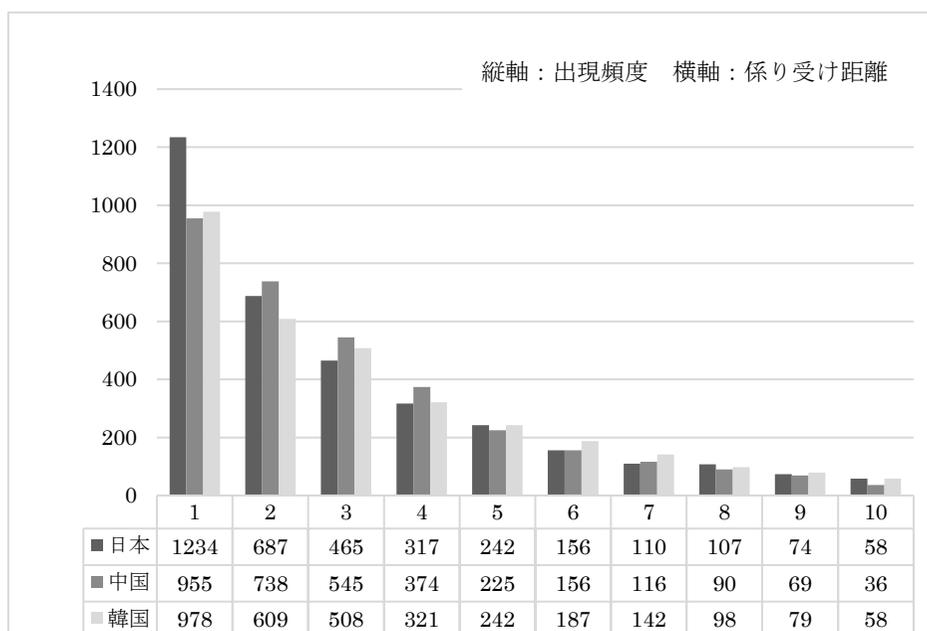


図1 係助詞と係り受け距離の関係

図1からわかることは、読点あり・なし含めた全体の頻度と距離との関係においては、係り受け距離が近いものが多く、遠くなるほど少なくなる、という全体的な傾向が係助詞にあることである。また、係り受け距離が6以上になると頻度に変化がほとんど生じないということもわかる。そこで、日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれ使用していた係助詞の中で、係助詞の直後に読点が打たれた場合と打たれていない場合で、どのくらい係り受け距離に違いがあるのかをそれぞれの平均値をもとにt検定を行った。

その結果、各作文群内でそれぞれ有意差が見られた(日本： $t=-15.1853$, $df=581.74$, $p=.000$ 、中国： $t=-9.707$, $df=436.639$, $p=.000$ 、韓国： $t=-8.136$, $df=214.307$, $p=.000$)。平均値を比較した場合でも、読点が直後にある方が約3文節ほど遠くに係りやすいことがわかった(日本：3.36-6.94、中国：3.42-6.40、韓国：3.80-6.85)。つまり、日本語母語話者も日本語学習者も読点を打つことにより、係り先が遠いことを示していると考えられる。

では、係り先までの距離が遠くなればなるほど、読点が打たれることが増えるのか、といった生起確率を測るために、距離ごとに読点が打たれる比率を計算した⁶。なお、今回は、総出現頻度が多かった「は」と「も」だけを対象として取り上げた。また、図1の係り受け距離が6以上では変化が大きいという全体的な傾向を考慮し、距離が6文節以上のものはまとめて6文節として扱った。

⁶ 生起確率は、それぞれの助詞で「読点が打たれた頻度 / (読点が打たれた頻度 + 読点が打たれなかった頻度)」を計算することで測ることができる。

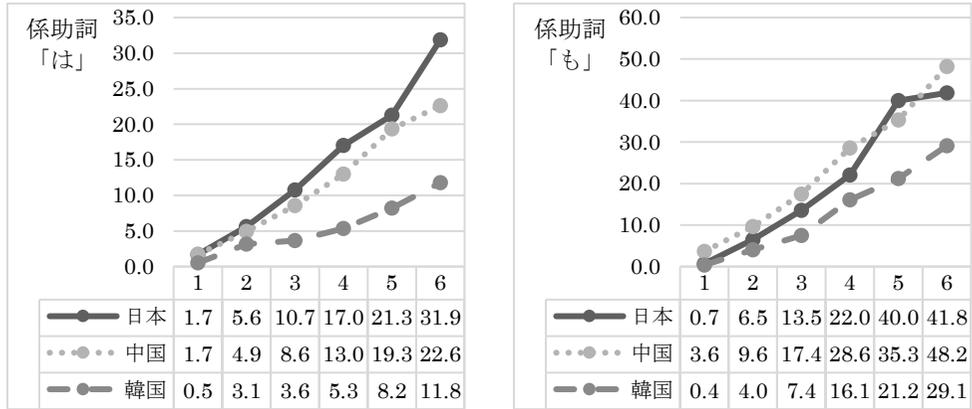


図2 係り受け距離と読点の出現確率の関係 (%)

図2は係助詞「は」と「も」の係り受け距離と読点の出現確率の関係を%で示したグラフである。縦軸は読点が打たれる確率(%)、横軸は係り受け距離を示している。また、国籍別の読点が打たれる確率(%)をそれぞれ下に示している。

まず、「は」の結果を見てみると、距離=1(直後に係る場合)では日本・中国・韓国で共通して読点は置かないことがわかる。距離=2、3では、日本と中国は読点ありの比率が高まるが、韓国はほとんど置かれぬ。そして、距離=4、5で日本と韓国は比率の伸びは変わらず10%以下のままだが、中国では最も比率の伸びが高くなり、20%近くまで読点が打たれる確率が高まる。最後の距離=6以上では、日本は読点を置く確率がかなり高まる一方(31.9%)、中国・韓国の読点を置く確率は少ししか伸びておらず(中国:22.6%、韓国:11.8%)、各母語間において約10%の差が観察されている。

一方、係助詞「も」の結果を見てみると、距離=1のときは全ての群において読点が置かれることがほぼないことがわかる(ただし、中国はこの時点で3.6%と他の母語群よりもやや高い)。距離=2、3、4のときは、日本と中国は次第に読点が打たれることが多くなるが、韓国はあまり伸びておらず、10%台のままである。距離=5で、日本は読点が打たれる確率がかなり高まり40%台になる一方、中国、韓国の伸びは比較的横ばいに近い伸びになっている。そして、逆に距離=6以上において、中国と韓国は読点を置く確率が伸びる一方、日本の読点が打たれる確率はほぼ横ばいになっている。

係助詞「は」と「も」の係り受け距離と読点が打たれる確率を観察した結果、全体的な傾向としては、係り先が遠くなるほど読点が打たれやすくなっていることがわかった。しかし、全体的に見た場合、日本語母語話者と中国人日本語学習者の読点と係り受け距離は10%以上の差は開いておらず、比較的類似した振る舞いであると言える。ところが、韓国人日本語学習者と日本語母語話者を比較した場合、20%以上の差が確認され、どちらかと言えば日本語母語話者とは異なった振る舞いであると言える。韓国人日本語学習者は「は」

で最も距離が遠い、距離＝6以上でも10%程度、「も」でも30%弱という結果であったことから、そもそも係助詞の係り受けと読点との関係性という観点から見れば、あまり考慮していない、もしくは読点を打つ際の強い要因としては働いていないと考えられる。

5.2 格助詞の係り受け解析の結果

次に、日本語母語話者と日本語学習者の格助詞の結果を見ていく。表5は、係り受け解析の結果、確認された全ての格助詞とその頻度を示した表⁷である。また、図3は読点の有無に関係なく、格助詞の出現頻度と係り受け距離をグラフ化したものである。なお、今回のグラフは傾向を見るために示すものであるため、10以上の係り先の頻度については対象外としている。

この図3からわかることは、格助詞においても係助詞と同様に読点あり・なしを含めた全体の頻度と距離との関係においては、係り受け距離が近いものが多く、遠くなるほど少なくなる、という全体的な傾向があることである。

表5 各作文群における格助詞の出現数

格助詞\国籍	日本	中国	韓国
が	2054	2058	2335
から	284	261	310
って	12	10	33
で	921	744	982
と	1000	867	946

格助詞\国籍	日本	中国	韓国
に	2342	2256	2200
の	103	97	75
へ	102	56	45
より	52	60	132
を	1865	1981	2178

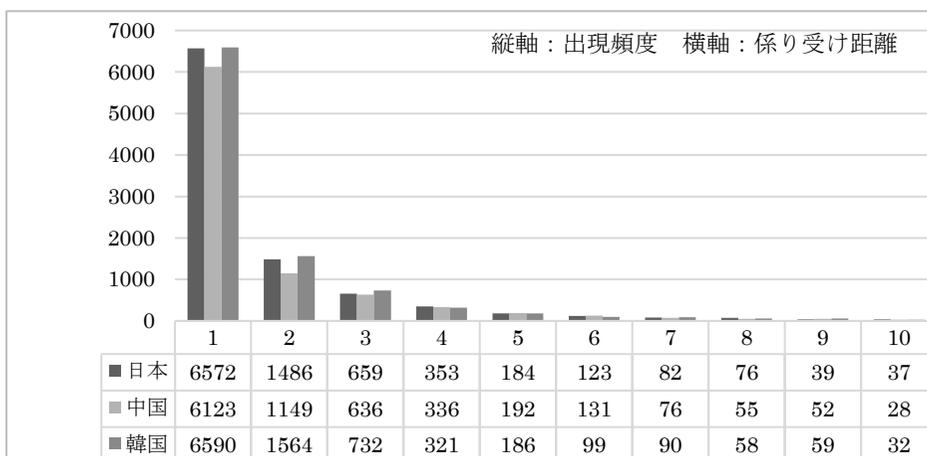


図3 格助詞と係り受け距離の関係

⁷ 紙幅の都合上、いずれかの作文群において出現頻度が0、または、形態素解析のミスと思われる結果は削除している。

しかしながら、係助詞の場合、係り受け距離が遠くなるほど出現頻度が緩やかに減少していくのに対し、格助詞は距離1から2にかけて急激に落ちており、それ以降距離=4までは緩やかな減少が見られ、距離=4以降では出現頻度にほとんど変化が見られなかった。つまり、格助詞は係助詞よりも全体的に遠くに係らないと言える。

係助詞の時と同様に、各群内の読点の有無により、係り先の差があるかどうかを、平均値をもとにt検定を行った。その結果、係助詞と同様に各作文群内で読点の有無による有意差が見られた(日本: $t=-17.512$, $df=361.92$, $p=.000$ 、中国: $t=-18.109$, $df=670.88$, $p=.000$ 、韓国: $t=-15.543$, $df=201.68$, $p=.000$)。また、平均値を比較した場合、読点が直後にある方が約4文節ほど遠くに係りやすいことがわかった(日本:1.71-5.17、中国:1.45-5.25、韓国:1.68-5.66)。これは、係助詞と同様に格助詞においても読点を打つことにより、構造的に係り先が遠くなることを示している、または示せることを考慮していると考えられる。では、係り受け距離との関係における生起確率はどうなっているのか。総出現頻度が500以上の5つの格助詞「が」「で」「と」「に」「を」(表5の網かけ箇所)を対象として係助詞の時と同様の方法で計算を行った(次頁図4)。なお、図3で見たように、格助詞は距離が4以上では変化が少ないため、距離が4文節以上のものはまとめて4文節として扱った。

以下では、紙幅の都合上、それぞれの格助詞の母語別による傾向は省略して、日本語母語話者の傾向を観察した上で、学習者の傾向と比較していく。

日本語母語話者は、格助詞「に」以外は、距離=4において20%の確率で読点が打たれている。また、格助詞「と」以外は全て係り受け距離が遠くなるに従って、読点が打たれる確率が増加している。格助詞によって読点が打たれる確率やその傾向に例外が生じている理由は、格助詞自体の意味や文内での位置が関係しているかもしれない。

次に、日本語母語話者と日本語学習者の比較をしていく。日本語母語話者と中国人日本語学習者の読点が打たれる確率と係り受け距離の遠近を比較した場合、格助詞「で」と「に」は類似した傾向を示したものの、全ての係り受け距離において中国人日本語学習者の読点使用が多かった。また、格助詞「が」「と」「を」については、読点使用が少なく、また、傾向も日本語母語話者とは異なっていた(ただし、格助詞「と」と「を」の距離=4では日本語母語話者と近い確率であった)。

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の読点が打たれる確率と係り受け距離の遠近については、格助詞「が」「で」「に」において、類似した傾向にあった。しかし、格助詞「で」の距離=4以外では全ての格助詞(「が」「で」「と」「に」「を」)で日本語母語話者よりも読点が打たれる確率が低かった。

今回の分析では、出現頻度が高かった5つの格助詞を取り上げ、係り受け距離と読点が打たれる確率を観察した。その結果、格助詞も基本的には係り先が遠くなるほど場合に読点が打たれる確率が高くなることが明らかになった。しかし、係り受け距離の遠近と読点使用の確率については、それぞれの格助詞、母語別に類似点と相違点が確認された。

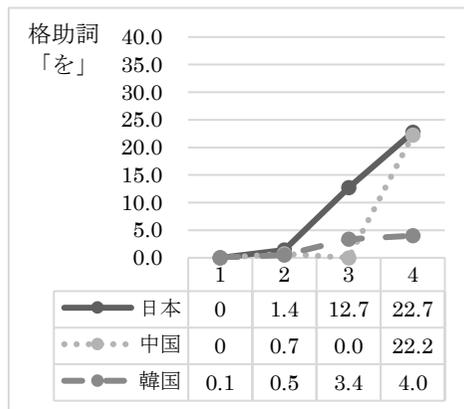
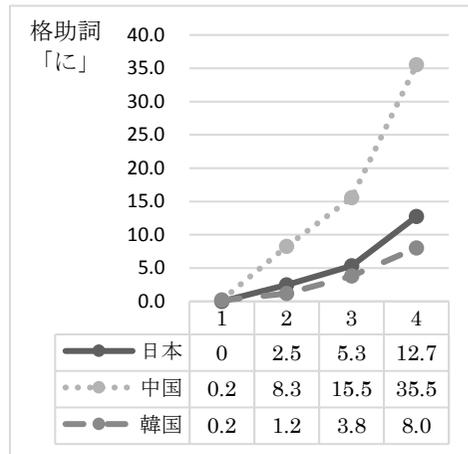
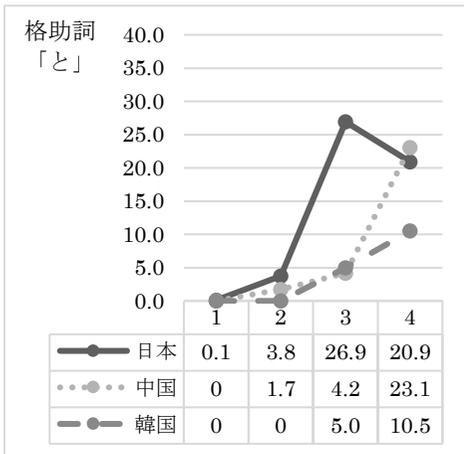
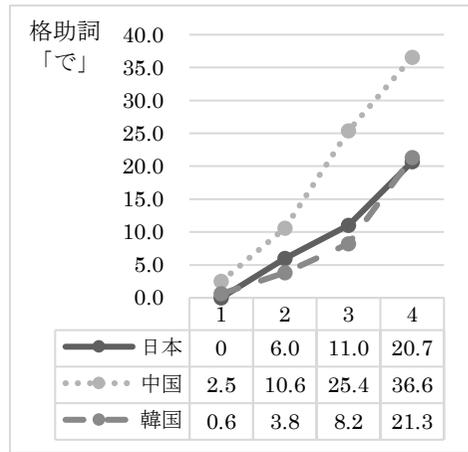
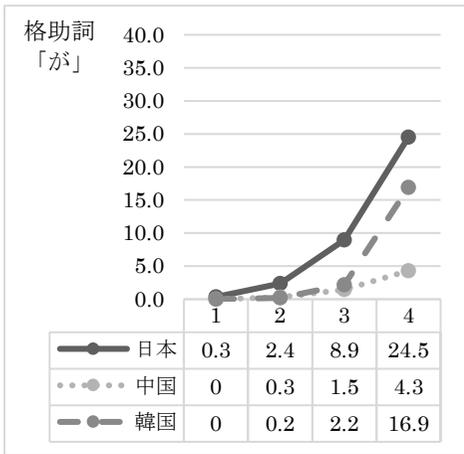


図4 係り受け距離と読点の出現確率の関係（%）

6. おわりに

以上、本研究では、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者が日本語で書いた作文を対象に、読点使用前に現れた品詞が母語別にどのように偏りがあるのかを明らかにした。その上で、最も偏りが大きかった係助詞と格助詞を取り上げ、読点と係り先の距離との関係性について分析を行い、日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者の読点の打ち方の違いをそれぞれ明らかにした。

本研究における分析と考察の結果を以下に整理する。日本語母語話者を基準とすると、中国人日本語学習者の場合、助詞、副詞、助動詞、名詞の直後での読点使用が多く、動詞の直後での読点使用が少ないことが明らかになった。韓国人日本語学習者の場合、日本語母語話者より読点使用が多かった品詞は確認されず、助詞、動詞、形容詞の直後での読点使用が少ないことが明らかになった。

また、最も偏りが大きかった助詞の中でも接続助詞と係助詞と格助詞に読点使用の差異が見られた。係助詞と格助詞については、係り受け距離が遠ければ遠いほど読点が打たれやすいということが明らかになった。これは、修飾と被修飾の関係を明示するためには必須の読点であると言える。そのため、係助詞「は」と「も」、格助詞「が」については、文末に係りやすい上に、文末から離れた位置にあることができるため、距離が遠くなるに従って読点が打たれることが多くなるという類似した傾向が確認された。しかし、その他の格助詞については、読点と係り受け距離との関係以外に、その格助詞自体の意味や文内で出現しやすい位置が関係しているために傾向に差異が生じた。

日本語母語話者を基準とした場合、中国人日本語学習者は係助詞「は」と「も」の後に読点が打たれる確率はほぼ類似していた。格助詞については、「で」と「に」は読点が打たれる確率が全体的に高く、「が」「と」「を」は、読点が打たれる確率が基本的に低かった。一方で、韓国人日本語学習者は、係助詞「は」と「も」の後に読点が打たれる確率は全体的に低かった。格助詞については、「が」「で」「に」の後に読点が打たれる確率が日本語母語話者と類似していたが、読点が打たれる確率だけを見た場合、基本的に全ての格助詞（「が」「で」「と」「に」「を」）で日本語母語話者よりも読点が打たれる確率が低かった。

学習者間の比較をすると、係助詞だけの結果を見た場合、中国人日本語学習者よりも韓国人日本語学習者のほうが係り受けの関係を捉えた読点の使用されにくいということが言える。格助詞については、韓国人日本語学習者のほうが日本語母語話者と類似していたが、これは文法構造が日本語と韓国語で構造が近いためであると考えられる。

なお、今回の分析で対象とした JCK コーパスは BCCWJ などの大規模コーパスと比べた場合、明らかに少ないテキスト量であることは否めず、量的に十分な調査・考察結果とは言いがたいことは事実である。そのため、本研究では、係助詞と格助詞の分析は統計解析にかけず、単純に確率からどのような傾向が見られるかという結果を示すだけに留めた。したがって、今回の調査結果だけから過度の一般化を図ることは難しく、他の視点からの

分析が必要であろう。対象となる品詞の文中における位置やその文字数、一文の長さなどといった変数を考慮したロジスティック回帰分析を行うなど、研究を重ねたい。さらには、今回の考察の対象から外した他の品詞についても分析を行い、読点の打ちやすさとその要因を明らかにしたい。その後は、読点は読み手にとってどのような影響があるのかについても研究を行い、読み手の理解を助ける読点の打ち方の指針を検討したい。以上が今後の課題である。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号 25370577「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(研究代表者:金井勇人)の補助を受けていることを記し、御協力いただいた関係各位に感謝致します。また、指導教員の国立国語研究所の石黒圭先生に感謝致します。他にも、係り受け分析の段階で有益なコメントを与えてくださった、国立国語研究所の小磯花絵先生にお礼を申し上げます。なお当然、本稿の誤りはすべて筆者一人の責任である。

分析資料

『JCK コーパス』 (<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>)

参考文献

- 岩崎拓也(2016)「中国人・韓国人日本語学習者の作文に見られる句読点の多寡」『一橋日本語教育研究』4、pp.187-196、ココ出版
- 岩崎拓也(2017 予定)「第5章 正確で自然な句読点の打ち方」石黒圭(編)『現場に役立つ日本語教育研究3 わかりやすく書ける作文シラバス』、くろしお出版
- 薄井良子・佐々木良造(2013)「中国人学部留学生の句読点の誤用に関する研究」『関西学院大学日本語教育センター紀要』2、p.66、関西学院大学 日本語教育センター紀要委員会
- 北村よう(1995)「中国語話者の作文における文接続の問題点」『東海大学紀要・留学生教育センター』15、pp.1-11、東海大学
- 金明哲・樺島忠夫・村上征勝(1993)「読点と書き手の個性」『計量国語学』18、pp.382-391、計量国語学会
- 小林伊智郎(2005)「文型と読点の関係-「ために」と「によって」について-」『拓殖大学日本語紀要』15、pp.69-77、拓殖大学留学生別科
- 佐々木良造・薄井良子(2013)「中国語を母語とする日本語学習者の句読点使用に関する研究」『関西学院大学日本語教育センター紀要』2、pp.5-19、関西学院大学日本語教育センター紀要委員会

白井諭・池原悟・横尾昭男・木村淳子（1995）「階層的認識構造に着目した日本語従属節間の係り受け解析の方法とその精度」『情報処理学会論文誌』36(10)、pp.2353-2361、一般社団法人情報処理学会

町田絵美（2006）「優先される読点-機能・位置・長さなどから-」『杏林大学国際交流センター附属別科日本語研修課程紀要』1、pp.131-143、杏林大学国際交流センター

（いわさき たくや 言語社会研究科博士後期課程）